

敗戦直後の青森県内の言説状況 — 占領期の『月刊東奥』と石坂洋次郎の役割 —

尾崎 名津子¹

要約

青森県の県紙に位置付けられる『東奥日報』を発行する東奥日報社は、戦前から日刊の新聞以外の定期刊行物を複数発行してきた。本稿ではそれらのうち1939年2月に創刊された総合雑誌『月刊東奥』について、占領期の発行分に絞り、敗戦直後の青森県内の言説状況の一端を明らかにするとともに、この媒体の特徴を検討する。また、弘前出身の作家・石坂洋次郎について、『月刊東奥』での発言と彼の創作との関係について考察を加える。

キーワード：東奥日報社、『月刊東奥』、占領期、石坂洋次郎、『青い山脈』

はじめに

本稿では、『東奥日報』を発行する東奥日報社の定期刊行物である、『月刊東奥』を対象として、占領期の青森県内の言説状況について概観することを試みる。占領期については復刻版が近年刊行され、その全容を目にすることができるようになってきている。今回はこの復刻版を参照しつつ稿を進める。

東奥日報社は1888年に創刊された『東奥日報』以外にも、戦前期から新聞以外の様々な定期刊行物を発行している。1928年には『東奥年鑑』を創刊し、翌1929年には日曜版に近い位置付けができる媒体の、『サンデー東奥』を創刊した。この1933年2月19日号には太宰治が「列車」という小品を発表しているが、これは初めて「太宰治」というペンネームを使用した作品として知られている。このように事業が発展していく過程で、1939年2月11日に『月刊東奥』が創刊された。発行部数が5000部、定価が40銭だった。この翌年の1940年には、戦時体制下における物資不足に対応すべく、新聞雑誌の整理統廃合をすることが閣議決定され、1941年に出版用紙配給割当規定が施行されており、全国的には出版メディアは苦境に立たされていたと言ってよい。そうした状況にあって、青森県内で総合雑誌を発行できたことは稀有だったということをはじめに述べておきたい。

1. 占領期の東奥日報社

東奥日報社は戦時中に青森空襲で社屋が焼け、1945年8月7日に河北新報社（宮城県）で新聞の代行印刷を開始していた。自社で印刷するために様々に奔走し、敗戦直後の1945年9月16日には北海道新聞社から輪転機の借り受け交渉が成立している。それが実現し、自力印刷の再開に至ったのは10月29日のことだった。このように、敗戦直後は新聞の発行それ自体が第一にして最大の問題だった。

1946年には青森空襲で損壊していた一号輪転機の修理が完了（2月29日）し、同年10月26日に同じ

¹ 弘前大学人文社会科学部

く戦災を受けた二号輪転機も修理を終え、再びこれらの輪転機を使用することが可能になった。設備が整う一方、同年末には用紙事情悪化にともないタブロイド型の縮小版を発行していたことから、物資不足は深刻化していたことが窺える。

その後、1948年に入ると大鰐通信部復活（4月1日）、野辺地支局開設（5月17日）、また、新社屋の落成（11月20日）など、報道の基盤が充実していくことが看取できる。また、この年は創立60周年にあたり、その記念事業として産業経済、学術文化、社会事業、スポーツなど各分野で活躍し、郷土の発展に貢献した個人・団体を顕彰する東奥賞を制定、12月には山本護太郎（「ホタテ貝の人工産卵」）、田中稔（「水稻耐冷耐病品種育成」）、豊島在寛（「リンゴ綿虫寄生蜂の繁殖」）に第1回東奥賞を授賞している。

一方、社内においては1946年3月に労働組合が結成され、争議も起こり、その結果4月23日に労働協約が締結され争議が終わると同時に、当時の全役員が退社した。また、GHQ/SCAPによる検閲をめぐっては、1946年6月29日付『東奥日報』の社説「読売争議とその教訓」について、その内容に問題があるとして7月21日に関係者が東京まで出頭するよう命ぜられた。結果的に、8月5日にはこの件に関し肅正の異動を行うことでGHQ/SCAPに向けて対応した事実を示すと同時に、10月4日には当時の工藤社長が辞任を申し出、12月に承認された。

こうして占領期の東奥日報社やそこを取り巻く環境には、再興とそれに伴う混乱とが様々に見られたが、『月刊東奥』はこの間も肅々と刊行されていた。同誌が終刊を迎える1950年には、1月11日に夕刊紙である『日刊青森』（1月21日に『夕刊東奥』に改題）が創刊された。物資の状況が回復するに伴い、まずは全国紙が前年中に夕刊の発行を復活させていたが、東奥日報社もこの流れに乗ったことになる。『夕刊東奥』には小説が連載され、その第一作は青森市出身の高木彬光による「魔弾の射手」（挿絵・村上秀雄、3月13日～8月29日）だった。第二作は大正末期から活躍し、時代小説を得意とした土師清二の「ひな鳥将軍」（挿絵・鳴下晁湖、8月30日～1951年1月5日）である。

次章以降では、この時期の『月刊東奥』の様相について複数の角度から検討を加える。

2. 『月刊東奥』を読む①——継続的に話題になった事柄

本章では占領期の『月刊東奥』誌上で継続的に記事のテーマとなった問題を取り上げるが、その前に敗戦直後の巻頭言を見ておきたい。巻頭言は「復興緊急版」と銘打たれた1945年9月号と10月号にのみ確認でき、表紙に印刷されている。雑誌の表紙は現在ではデザイン性を重んじる向きもあるが、当時の『月刊東奥』には表紙に無署名の巻頭言と目次が印刷されており、実質的に本誌の1ページ目と見做すことができる。

1945年9月号の巻頭言「新生の土を耕す」は、「土地は狭く、人口は過剰となる。この悪条件のもとに、新生日本の苦難の道が展かれる。北海道、内地百五十万町歩の開墾は、かくして国民自活の血路として拓かねばならぬ当面の題目であるが、しかし、東北地方とくにわが青森県においては、比較的未開発の土地に恵まれてゐる。」と書き出されている。土地を新たに切り拓くことを訴えるとともに、「既耕地の集約的活用、土地実態の科学的把握、輪作様式の確立、適地適栽と多角経営の工夫等高冷地帯における科学技術の浸透」といった科学的な知見を強く求める内容となっている。

10月号になると食糧事情悪化に対する危機感が浮上する。「日本人を殺すな！」と題された巻頭言には、「官は文字どほり茫然自失の態から脱して居らず、供出にもなんら積極的熱意を示してゐない。軍官に裏切られた農村ではその衝撃から中には利己我執の農民をさへ生んでゐる。」とあり、物資不足と併せて人心の乱れが指摘されている。そして、タイトルの通り「日本人を殺すな！」、また「青森県人を殺すな！」という文言で締められている。

このように、喫緊の問題として浮上した食糧問題は、敗戦直後から継続的に話題とされていることが分かる。図表1ではこのことに関連した記事を挙げる。

年月	記事タイトル、執筆者など
1945年 9月	「新しい食糧開拓 雑草食と粉食」(成田末五郎)
1945年 10月	「日本農業の改新时期来る 飢餓克服の弁」(淡谷悠蔵)
1945年 10月	「科学技術を生かせ 食糧」(内田重義)
1945年 10月	「あなたの足もとに食べられる草がある」(佐藤雨山)
1945年 11月	「インフレと俸給生活 食糧増配の国民運動を起せ！」(鳴海清四郎)
1946年 2月	「風俗時評 踊り子と栄養失調」(相馬重一)
1946年 7月	「食ふということ」(西澤赤子)
1946年 7月	「食糧の民主管理—救援米運動成功の前提—」(大塚英五郎)
1946年 8月	「天明飢饉の話 ケカチ町イカモノ食堂」(相木司良)
1946年 9月	「食糧増産と地方競馬」(小笠原八十美)

図表1 占領期『月刊東奥』に掲載された食糧問題関連記事

2号分の巻頭言をなぞるように、誌上でも食糧問題と科学的知見の重視とがセットで語られる傾向があることがわかる。しかしながら、1946年9月以降は食糧問題が誌面に浮上しなくなる。これを食糧事情の改善と見ることは正確ではない。事態は『月刊東奥』の質的变化を示しているとするべきで、具体的には文芸やエッセイなどが評論・論文を押し出す形で増加したというのが実態である。

食糧事情を問題化する言説は減少したとはいえ、農業が基幹産業となっていた青森県の現状を反映してか、農業（あるいは漁業、畜産業）それ自体を扱う記事は占領期で一貫して確認することができる。それらを図表2として示す。

年月	記事タイトル、執筆者など
1946年 2月	「戦災疎開者は叫ぶ 農村指導者に与ふ」(坂本義英)
1946年 4月	「再建の構想 青森県に於ける農民組合運動」(淡谷悠蔵)
1946年 7月	「農業生活を根本的に変へねばならぬ」(本多浩治)
1946年 7月	「農村化学 メチール事件」(秋田武則)
1946年 8月	「富樫鉄之助翁のこと—酪農雑感—」(松田武四郎)
1946年 9月	「肥料問題について」(苦米地義三)
1947年 1月	「農民文学の課題 所謂『農民的なもの』の一考察」(淡谷悠蔵)
1947年 4月	「今日の農村・明日の農村」(山本省一)
1947年 4月	「農村文化運動について」(鍵山博史)
1948年 3月	「センサスにあらわれた青森県農業の構造」(山本省一)
1948年 5月	「農地改革の進路に横わる障害」(古川道一)
1948年 5月	「農村風俗 さくら・さけ・おどり」(淡谷悠蔵)
1948年 7月	「甦つた陸奥湾の帆立=人工産卵が成功するまで=」(乗田幸三)
1948年 7月	「酪農部落戸来 搾乳・クリーム・バター 農村の新しい道」(松田勲)
1948年 10月	「秋風に空しい義経の伝説 開村以来イカの豊漁—三尻、龍飛を踏査する—」(下山俊三)
1949年 2月	「インフレ・恐慌・農地改革」(山本省一)
1949年 4月	「素朴な農村の習慣 奇習 ハダカ参り」(下山俊三)
1949年 10月	「たくましい農協組—北海道農業視察記—」(山本省一)

図表2 占領期『月刊東奥』誌上の農業関連言説

農業、漁業、畜産業に関する記事が一貫して見られることには、それらの執筆を担った複数の書き手が存在していたことが要因の一つとして挙げられる。4本の記事を寄稿している山本省一は、誌面によれば当初『東奥日報』の論説部長であったが、のちに編集局次長という役職に変わっている。3本寄稿した淡谷悠蔵は「元全国農民組合中央執行委員」という肩書であったが、占領期後期には「農園経営者」となっ

ている。2本執筆した下山俊三は1948年時点で東奥日報弘前支局が所属となっていたが、翌年には出版部長となっている。

こうした主要な寄稿者が取材や実体験を元に記事を執筆しており、青森県の農産業を多角的に書き残している。その他に継続的に話題とされた事柄については、『月刊東奥』以外の媒体も含めて相対的に検討、評価する必要がある。本稿ではその前提として、『月刊東奥』だけを繙いたときに浮上する点を挙げるにとどめる。この観点から見た場合、文学者の寄稿について検討することは避けられない。

3. 『月刊東奥』を読む②——文学者の寄稿

本稿では文学者とは、作家、詩人、歌人、俳人以外にも、評論家、翻訳家、研究者なども含意している。まずは、以下にこれに該当する記事を時系列にそって列挙する。

- 1945年11月 「八甲田の見える町の風俗」(秋田雨雀)、「詩二篇 或る夕方に／自分は生きる」(一戸謙三)
- 1946年 2月 「婦人参政権と青森県女性」(板垣直子)、「煙草について」(沙和宋一)
- 1946年 4月 「北方のメーデー」(秋田雨雀)
- 1946年 5月 「詩など」(一戸謙三)、「文学の再建」(平田小六)
- 1946年 9月 「登山」(増田手古奈)
- 1946年10月 「軍歌」(沙和宋一)
- 1947年 1月 「新しい形の個人主義」(太宰治)、「作家と教養—『イタリア紀行』などを中心にして—」(板垣直子)、「雑詩四篇」(一戸謙三)、「よき果実、よき人(政治学校道場にて)」(秋田雨雀)、「或る人」(平田小六)
- 1947年 4月 「随筆 大宝日記」(室生犀星)、「光りと文化」(北園克衛)
- 1947年 6月 「随筆 浅間山」(室生犀星)、「新しい恋愛観から 日本」(秋田雨雀)
- 1947年11月 「文化論(講演速記)」(今日出海)
- 1948年 3月 「鳳凰を食う話」(北畠八穂)、「汽車について」(沙和宋一)
- 1948年 8月 「最後の太閤」(津島修治) ※太宰治追悼号。寄稿者は北畠八穂、丹羽文雄、板垣直子、沙和宋一、今官一。
- 1948年12月 「青い果実」(今官一)
- 1949年 3月 「明日の文学はどこに」(小田切秀雄)、「栗とキノコ」(室生犀星)、「地方に住む作家の立場」(沙和宋一)、「盗人」(北畠八穂)
- 1949年 4月 「翻訳権のこと」(河盛好蔵)
- 1949年 7月 「若い女性への苦言」(坂西志保)
- 1949年 8月 「下田開港」(今官一)
- 1949年10月 「今日の科学 世紀の天文写真」(野尻抱影)、「はだかテツガク」(丸木砂土)
- 1949年11月 「随筆 虫の世界」(沙和宋一)、「小説とモデル」(立野信之)
- 1950年 1月 「ラジオ評 本当らしいニセモノ」(青野季吉)
- 1950年 2月 「すいせんの言葉 静かなる奔流」(今官一)
- 1950年 3月 「若い文化の創造を」(秋田雨雀)、「奥様お手をどうぞ」(今官一)、「日の丸風船」(沙和宋一)、「昔ばなし 大正八九年頃の中学生」(平田小六)

占領期に青森に疎開していた秋田雨雀や、一戸謙三、増田手古奈、沙和宋一など青森県在住の人びとが寄稿することは、入稿から発行までの便宜を鑑みれば当然とも言えるが、目立つのはそれ以外にも、青森県にゆかりのある人物が多く寄稿していることである。

たとえば、平田小六は秋田県大館生まれだが、弘前中学校を卒業している。1923年に教員資格を取得し、青森県の小学校に勤めた。1929年に上京し、東京毎日新聞などに勤務するかたわら、1933年11月から『文化集団』に長編『囚はれた大地』を連載し、注目された。この作品は農民の苦境を描いたものである。1938年に中国大陸に渡るが、戦後は早期に引き揚げ、1946年には文芸誌『群像』に「片隅で」を発表することで作家として復帰している。平田が『月刊東奥』に盛んに寄稿していたのはこうした時期にあたる。

板垣直子は青森県北津軽郡栄村湊（現五所川原市）出身の文芸評論家である。青森県立弘前高等女学校（現在の弘前中央高校）を卒業したのち、日本女子大学英文科に進学している。その後、1921年には当時女子の入学が許されていなかった東京帝国大学の第1回女子聴講生となり、美学と哲学を学んだ。女性のための文芸同人誌『女人芸術』の編集委員として、林芙美子を見出したこと、また、1941年に単著『事変下の文学』を出版したことで知られる。戦前から継続的に活動した女性の文芸評論家として稀有な存在であり、占領期には『新潮』などの老舗文芸誌に論評を執筆するなど、権威化されていた。

他にも今官一や北畠八穂など、青森在住ではないが寄稿を重ねた青森県出身者が多い。

一方、青森県と関わりのない文学者も多く寄稿している。「ふるさとは遠きにありて思ふもの」の詩句で知られる『小景異情』（1913年）などがある室生犀星（1889-1962）や、戦前には日本におけるシュルレアリスム運動を先導したモダニズム詩人の北園克衛（1902-1978）らがそれにあたる。こうした人びとの寄稿は、『月刊東奥』が独自に依頼したものと、他の地域の媒体に掲載されたものの再掲載など、いくつかのパターンがある。こうした中でも特筆すべきは、『月刊東奥』における石坂洋次郎の役割である。

4. 『月刊東奥』における石坂洋次郎の役割と『青い山脈』

弘前市生まれの石坂は、旧制弘前中学校を経て1919年に慶應義塾大学文学部予科に入学した。1925年に大学を卒業後、弘前高等女学校に奉職する。のち秋田県立横手高等女学校から県立横手中学校へ転任するなど、教員生活を勤めるかたわら創作を行った。その後専業作家となる。デビュー作「海をみに行く」（1927年）以来、『三田文学』をおもな発表舞台としたが、『若い人』（1933年）によって作家としての地位を確立したといえる。

占領期の石坂は東京都内に暮らしていたが、『月刊東奥』に多数寄稿しており、他の文学者やそれ以外の寄稿者に比しても本数においては群を抜いている。それらについて以下の図表3にまとめる。

年月	記事タイトルなど
1945年9月	「生活に自主性を」
1946年2月	「青森県における封建制を暴く」（座談会）
1946年2月	「感ずること」
1946年5月	「今年の観桜会」
1947年1月	「推薦の言葉」（工藤武雄「檻樓」を推薦）
1949年2月	「私が十歳のとき」（ハガキ回答）
1949年3月	「小説、戯曲の部 選後短評」
1950年2月	「若返りの弁」（ハガキ回答）
1950年3月	「郷土の風物に胸弾む」

図表3 占領期『月刊東奥』に掲載された石坂洋次郎関連記事

先取りして述べれば、こうした記事で石坂が形成する言説と、石坂の占領期を代表する小説『青い山脈』テキストとの相同性が看取できる。

『青い山脈』は『朝日新聞』1947年6月9日から10月4日まで連載された。その後、単行本化される

とそれがベストセラーとなった。東北地方の私立女子高校を舞台に、教員と生徒、町の人びとがそれぞれの問題（恋愛、結婚や学校生活など）の解決を目指すという筋になっている。

この作品の舞台については、東北地方であることは示唆されるが、具体的な地名は書かれていない。ただし、作中人物の一人である高校生の松川浅子が書いた作文には、次のように書かれている。

観桜会……今年の観桜会はほんとうに盛んでした。私も浮かれて、毎日一回、公園に行ったほどです……。私は芸者たちの手踊りに一番感心しました。さすがに日本の伝統の粋だと思いました……。

この記述を見る限り、「観桜会」、「手踊り」といったワードから弘前を想起することができるだろう。観桜会はそれほど一般的な名称ではなく、弘前以外には新潟県上越市にこうした呼称の祭りがあることが確認できる程度である。また、手踊りは一般名詞ではあるが、それを「芸」として見せる文化があるのは南部と弘前である。しかし、『青い山脈』の中心人物の一人である英語教師の雪子が、放課後に「丘の上に一人になり」、「青くないだ海に向かって、大きく深呼吸を」する場面がある。これを踏まえると作品の舞台は弘前を想起させつつも海が間近に見える、架空の町ということになる。

観桜会について、石坂は『月刊東奥』1946年5月号にエッセイ「今年の観桜会」を寄せている。しかし、その内容は松川浅子の作文とは異なり、花見の華やかさに隠されがちな事実を浮き彫りにする意図が明白である。石坂は戦後復活した観桜会の盛況を冒頭で伝えるが、「しかし、今年の観桜会に示された景気が、そのまま、この地方の実力だと見るのは、もちろん当たらない」、「観桜会のバカ景気」と言い、観桜会の二週間後には青森県内の各地で米不足を訴える声が上がったと伝えている。

強い言葉使いは石坂の創作と懸隔があるが、エッセイや評論など、つまり『月刊東奥』における石坂の舌鋒は鋭い。「感ずること」（『月刊東奥』1946年2月）では、「毎日の新聞を読んでも、日本の国は一体どうなるものかといふ暗い気持ちに襲はれる」、「民主主義とか自由主義とかいふ言葉は箒で掃くほど出て来るが、国民の現実生活の上に泡沫のやうに浮び上つてゐるだけで、果してそれが国民の生活を内面から動かしていく原動力となつてゐるものかどうかが疑はしい」と憂いてみせる。これに続く次の批判は、『青い山脈』を讀解するうえで重要な記述である。

客観的にみると、やはり党派や階級の立場に重きが置かれて、国家の立場が閑却されてゐる傾向だと思ふ。寒心すべきことである。

狭量でセクト的であるといふのが、日本の民族性の大きな欠陥と云はれ、われわれもその具体化した現象を従来の政治、宗教、教育、芸術、軍事等の上に飽きるほど見せつけられて来たのであるが、今日の国内の動きのなかにもそれと変わらない狭さと貧しさが感じられる。

個人としても民族としても、もつと鷹揚な豊かな気分を身につけたいものだと思ふ。民主主義の狙ひ所もそこらにある筈である。

また、このエッセイの掲載号では、「民主主義化を阻むもの」という特集が組まれている。その中には座談会「青森県における封建制を暴く」が掲載され、石坂も参加している。他の出席者は、津川武一（弘前社会科学研究会）、淡谷ナオ（青森県農民組合準備委員長・淡谷悠蔵氏夫人）、瀬戸義久（青森放送局長）である。ここでの石坂の肩書は「日本文壇の大家」となっており、全国的に名を知られた人物であることが強調される一方で、『月刊東奥』読者に対して指導的な役割を担わされていることも看取できる。ここでの発言も先の引用と同様、『青い山脈』讀解の鍵となる。

封建制度の成立や、それが今日の社会組織の上にどんな形で残つてゐるかといふやうな問題に就いては、他に適当な解説者があることと思ひますが、さう難づかしい所まで考へなくとも、われわれの

周囲には、封建的な風習が充満してゐることを反省出来ると思ひます。

男の権力が強くて女が其従属的地位に置かれてゐること、夫婦の関係でも同様であること、官衙や会社等に於ける上下の関係が概ね理非を絶した冷い形式的なものであること、男女間のモラルが極端に歪曲されてゐること、衣食、住にわたつて暮らし方が甚だ非科学的であること、腹の中で考へてゐることと口先きで云ふことが反対であり、しかもそれが社会的な作法のやうに考へられてゐること、その他数へきれないでせう。

石坂本人のこうした発言の数々が、『青い山脈』内で反芻されている。作中人物の校医・沼田は、「土地の人間の一人」として、次のように雪子に告げる。

この学校には農村の子女が多いようですが、学校を出る、二、三年して嫁に行く、するとさっきの作文にあったように、しゅうと、しゅうとめや小じゅうとたちから嫁いびりをされる、亭主からはときどきげんこで頭をなぐられる〔中略〕そういう生活に堪えていくには、ある程度バカであることが必要なんですよ。

これは座談会で石坂が述べたような「男女間のモラルが極端に歪曲されてゐること」を、作中人物の在り方そのものによって表象している。同様のことは雪子についても言え、石坂がエッセイ「感ずること」で述べた内容を小説においてトレースするものとなっている。雪子の発言を以下に引用する。

いいですか。日本人のこれまでの暮らし方の中で、一番間違っていたことは、全体のために個人の自由な意志や人格を犠牲にしておったということです。学校のためという名目で、下級生や同級生に対して不当な圧迫干渉を加える。家のためという考え方で、家族個々の人格を束縛する。国家のためという名目で、国民をむりやりに一つの型にはめこもうとする。

それもほんとに、全体のためをかんがえてやるのならいいんですが、実際は一部の人びとが、自分たちの野心や利欲を満たすためにやっтерることが多かったのです。

この発言が石坂の発言を忠実に踏襲していることは明らかであり、生徒たちにこうして語って聞かせる雪子のありようは、そのまま『月刊東奥』読者に向けて発信する「日本文壇の大家」・石坂のありようと重なっている。

5. おわりに——『青い山脈』の新子が象徴する問題

以上のように、占領期『月刊東奥』では、敗戦直後の社会をどこから再建するかということに関する記事が多く掲載される一方で、文学者の寄稿を増やしていくことで雑誌の性格それ自体を少しずつ変容させていった。その中でも石坂洋次郎の位置は特異である。石坂は、青森県出身で戦前から全国的に知られた作家であると同時に、社会の混乱や民主化に対する意見を発信する存在として、指導的な位置に置かれていたと言えるし、同時に石坂本人もそうした役割を自ら引き受けるような発言を重ねていた。さらに、石坂自身は誌上での発言の内容を、その直後に自身の創作の中で作中人物に再度語らせている。そして、その創作『青い山脈』は全国的に広く読まれる作品となった。

『青い山脈』では、石坂自身の批判そのものをヒロインの雪子が行い、それに対して沼田が批判すべきとされる内容を表象する存在として定位されていた。その後、沼田と雪子の恋愛関係が成立するに及んで、沼田の封建的な側面が脱色されたかのように読める。

一方で、もう一人のヒロインで女子高校生の新子は、雪子とは異なる表象となっている。それは、彼女

を見つめる男性作中人物の高校生「ぼく」（六助）が象っている。

黄色な三角巾で頭を包み、紺ガサリの筒袖と同じ柄のモンペを着け、海老茶色のシユスの足袋にワラ草履をはいて（色彩がハッキリしたのはもっと時間が経ってからだったが……）、土蔵からせっせとリンゴ箱を運び出している、身体つきのたくましい田舎の若い女——それが新子だったのだ。

リンゴの収穫を手伝う「身体つきのたくましい田舎の若い女」として、六助が新子を新たに見出した場面である。この時六助は、「彼女とぼくの間柄が、流星が尾をひいて流れるように、急に何千万里もスウッと遠ざかったようなさびしさに打たれた」と述べる。〈戦後の高校生〉として学校で学び、放課後を思い思いに過ごすだけでよかったはずの六助と新子との間に、線引きがなされる瞬間である。その直後に六助は新子の姿を「この上もなく、すこやかな、美しいもの」と思い直している。このように、新子は男子高校生である六助と、彼自身の手によって慎重に切り離され、彼岸に押し出され、「身体つきのたくましい田舎の若い女」の「すこやかな、美し」さを具えた人物とされる。そのことは、六助のメンターの役割を担う富永安吉が六助に宛てた手紙において「善悪の彼岸の世界のもの」とされる点で、すなわち当事者以外の〈大人の男性〉の視線によって意味付けが補強される。

この石坂の書きぶりは、農村女性の表象を男性の視線と語りのもとにとどめておくものであり、彼女たちの実態ではない。見方によっては石坂自身が批判した「男の権力が強くて女が其従属的地位に置かれてゐる」状況をロマンチックに補強するものともなってしまう。こうした隘路に陥る側面もあることを指摘しつつ本稿を終えることにする。

<参考文献>

- 三人社編（2017）『『月刊東奥【戦後版】』復刻版 第1巻 1945年版・1946年版』三人社、pp.1-316.
三人社編（2017）『『月刊東奥【戦後版】』復刻版 第2巻 1947年版』三人社、pp.1-300.
三人社編（2018）『『月刊東奥【戦後版】』復刻版 第3巻 1948年版・1949年版①』三人社、pp.1-392.
三人社編（2018）『『月刊東奥【戦後版】』復刻版 第4巻 1949年版②・1950年版』三人社、pp.1-384.
石坂洋次郎（2018）『青い山脈』小学館、pp.5-334。（初出『朝日新聞』1947.6.9-10.4、初刊：新潮社、1952）

〔付記〕

本稿は、令和2年度地域未来創生教育・研究プロジェクト、ならびに人文社会科学部戦略的研究「地方から公共性を問い直す——ローカルメディアを基点として」の成果の一部である。